

第四章 光る源氏の物語 若君の五十日の祝い

[第一段 三月、若君の五十日の祝い]

弥生になれば(三月になると)、空のけしきもものうららかにて(天気も概して穏やかで)、この君(六条院の若君は)、*五十日のほどになりたまひて(五十日の祝をする頃におなりで)、いと白うつくしう(とても色白で可愛らしく)、ほどよりはおよすけて(発育も良く)、物語などしたまふ(良く声を出してお話しなさいます)。 *「五十日(いか)のほど」はく生後五十日ほどになる。五十日の祝がある。>と注にある。「五十日の祝ひ」はく子供が生まれて50日目に行った祝い。父や外祖父などが箸を取って、赤子の口に餅(もち)を含ませる。平安時代に、主として貴族の間で行われた。いか。>と大辞泉にある。実際の離乳食は早くても四ヶ月、多くは月齢五ヶ月くらいとのことで、二ヶ月弱では早過ぎて、形だけ、親の気持としての健康願い、ということのようだ。特に、男親が箸を持つ、というのは家や一族の繁栄の願いを象徴しているような印象だ。今でも普通に行なわれる「お食い初め」はく出生後初めて食事をさせる祝いの儀式。新調の膳(ぜん)を使って食べさせるまねをする。生後100日目にする所が多い。箸(はし)立て。箸揃(はしそろ)え。百日(ももか)。>と大辞泉にあり、こちらは実際の発育に即している。

大殿渡りたまひて(源氏殿は母屋の宮の部屋にお越しになって)、

「御心地は、さはやかになりたまひにたりや(ご気分はよろしくおなりですか)。いでや、いとかひなくもはべるかな(いや、是は惜しまれることですね)。例の御ありさまにて(普通の御姿で)、かく見なしたてまつらましかば(このようにあなたとの回復ぶりを拝見できましたのなら)、いかにうれしうはべらまし(どんなに喜ばしいことだったでしょう)。心憂く(残念にも)、思し捨てけること(御出家なさってしまわれたので、盛大な回復祝も憚られます)」

と、涙ぐみて怨みきこえたまふ(と涙ぐんで嘆き申しなさいます)。日々に渡りたまひて(殿は此方に毎日お越しになって)、今しも(今さらながら)、やむごとなく限りなきさまにもてなしきこえたまふ(丁重にこの上なく宮をいたわり申しなさいます)。

御五十日に餅参らせたまはむとて(五十日の祝いで餅をご用意申し上げようという時に)、容貌異なる御さまを(臨席の母宮が尼姿でいらっしゃることを)、人びと(女房たちは)、「いかに(そのままで良いのだろうか)」など聞こえやすらへど(などと手を止めてご心配申し上げたが)、院渡らせたまひて(殿はお越しになって)、

「何か(構わない)。女にものしたまはばこそ(女の子でいらしたら)、同じ筋にて(母が手本となって)、いまいまくもあらめ(不都合かも知れないが)」

とて(と言って)、南面に小さき御座などよそひて(南向きになる首座に若君のための小さい御座を用意して)、参らせたまふ(お祝い申し上げなさいます)。

御乳母、いとはなやかに装束きて(若君の乳母はとても華やかに着飾って)、御前のもの(祝い料理として式場に出された)、いろいろを尽くしたる(いろいろと手の込んだ)*籠物(かごの果物や)、*桧破籠の心ばへどもを(折箱の菓子類などを)、内にも外にも(うちにもとにも、御簾の内

でも外でも)、*もとの心を知らぬことなれば(若君が不義の子という真相を知らぬことなので)、*取り散らし(奔放に取り愛でて)、何心もなきを(素直に祝っているのを)、「*いと心苦しうまばゆきわざなりや(まことに気まずく不本意な立場だ)」と思す(とお思いになります)。*「籠物(こもの)」はくかごに入れた果物。木の枝につけて、献上物または儀式のときなどに用いる。>と大辞泉にある。*「桧破籠(ひわりご)」は「わりご(破籠、破子)」の上等なもの、と古語辞典にある。「破子」はくヒノキの白木で作った折り箱のような食物を入れる容器。内部に仕切りがあって、かぶせぶたになっている。現在の弁当箱。また、食物の入った破子や、その食物をさす場合もある。折り詰め。>とある。菓子折りだろうか。*「もとの心」はく『完訳』は「若君が柏木の実子という真相」と注す。>と注にある。従うが、この場面の賑わいを演出するためか、ずいぶん雑に挿入してある書き方の印象で、事の重大さに比して「もとの心を知らぬ」という言い方は簡素に過ぎるような気がする。*「取り散らす」はく取って散らかす>だろうが、実際に乳母たちが菓子類を散らかした、とは思えないから、是は乳母たちがそれらの祝い菓子の出来栄を辺り憚らず是見よがしに愛で騒いだ光景を表現した言い方、かと思う。が、あまり自信はない。別の意味があるのかも知れない。それに、こんな分かり難い語に何の注釈もない、というのも意外だ。*「いと心苦しうまばゆきわざなりや」は如何にも苦笑いで目を細める殿の表情が目には浮かぶようだが、それにしても「心苦し」も「まばゆし」も言い換えに苦労する。まばゆし一面映し一面目ない、となると、自分が悪いような言い方になって、確かに源氏殿に管理責任はあるものの、密通の不祥事も、それで宮が懐妊する宿縁も、男御子という世間に曝される存在を抱えたことも、思いもよらずに降りかかった火の粉であって、それらを源氏殿の落ち度とは、少なくとも一義的には、そして特に本人には、納得できないことだろう。また、拙い事態だ、不都合な成り行きだ、というのも実際そうだろうが、それは分かっていることで、此処で実感するのは、それでも責任を免れなさそうな自分の不都合な立場を改めて思い知る、ということかと思う。

[第二段 源氏と女三の宮の夫婦の会話]

宮も起きぬたまひて(宮も起きていらっしゃって)、*御髪の末の所狭う広がりたるを(髪の毛の先がまとまらずに広がっているのを)、いと苦しと思して(とても見苦しいとお思いになって)、*額など撫でつけておはするに(前髪を耳の後ろに撫で付けていらっしゃる時に)、几帳を引きやりてぬたまへば(殿が几帳を引き退けて前にお座りなされたので)、いと恥づかしうて背きたまへるを(宮はとても恥づかしくて横を向きなされたが)、*「御髪の末の所狭う広がりたるを」は宮の寝起きの髪の毛について<尼削ぎの裾が広がっている様子。>と注にある。*「ひたひ」は<額髪=前髪>。

いとど小さう細りたまひて(その御姿は、以前に増して小さくお痩せになって)、*御髪は惜しみきこえて(髪の毛は剃髪を仕うまつた僧が惜しみ申して)、長う削ぎたりければ(長めに切り落としていたので)、後ろは異にけぢめも見えたまはぬほどなり(後ろ髪は入道宮とも見えなさらぬほど長くて)、*「御髪は惜しみきこえて」は他動詞に敬語が無いので朱雀院が主語ではなく、与謝野訳文の<髪は授戒の日にお扱いた僧が惜しんで>に従う。

*すぎすぎ見ゆる鈍色ども(だんだんに濃くした何枚かの灰色僧衣に)、黄がちなる*今様色など着たまひて(黄色い花模様の濃き紅梅色の上着を着けなさって)、まだありつかぬ御かたはらめ(まだ尼姿が身に付かない御横顔は)、かくてしもうつくしき子どもの心地して(こうなってもまだ可愛い子供の感じで)、なまめかしうをかしげなり(優雅で高貴な風情です)。*「すぎすぎ見ゆる」の字面は<次々に見える>だが、与謝野文には<次々に濃くした>とあり、此処まで言って、やっと文意が分かる。「鈍色(にびいろ)」は<鈍い色=ねずみ色、灰色>。「鈍色ども」は<何枚かの喪服、僧衣>。*「今様色(い

まやういろ)」は<濃い紅梅色>と古語辞典にある。与謝野文には是を、桂の下の単衣、としてあるようだが、物の言い方として、重ね着の後にその下着を説明する時は脱衣場面になる筈で、是は濃き色の表着ないし小桂ないし細長などの上衣に違いない。

「いで、あな心憂(いや何と残念な)。墨染こそ(墨染めの僧衣は)、なほ、いとうたて目もくるる色なりけれ(やはりとても悲しく目も暗む色だな)。かやうにても(このようにあなたが仏門入りなさっても)、見たてまつることは(お会い申すことは)、絶ゆまじきぞかしと(絶えずに出来るものと)、思ひ慰めはべれど(思い慰めておりますが)、*古りがたうわりなき心地する涙の人悪ろさを(昔が忘れられずに諦められない気がして涙する未練がましい私のみっともなさを)、いとかう思ひ捨てられたてまつる身の咎に思ひなすも(まさにこうしてあなたにお見捨てられ申す私の欠点だと考えてみるにつけても)、さまざまに胸いたう口惜しくなむ(いろいろと胸が痛んで悔しくなります)。*取り返すものにもがなや(いっそ、自分が未練がましくなる前の昔にまで、帰ることが出来たらなあ)」 *「ふりがたし」は<古くなる事が出来ない=昔が忘れられない>。 *「取り返すものにもがなや」は<昔に帰れるものならなあ>だから、「古りがたうわりなき心地する」自分は相変わらず昔が懐かしいから、今は変わってしまった貴方が変わる前の昔に帰りたい、という言い方なのだろう、普通。ところが、この言い回しは<「取り返すものにもがなやいにしへを在りしなごらの我が身と思はむ」(出典未詳-源氏積所引)>という歌が下敷きとして参照指摘されている。「在りしなごらの我が身と思はむ」は<昔の自分に返れるから>で、是では、変わってしまった自分が理想を持っていた昔に帰って、もう一度人生をやり直したい、という言い方になってしまう。だから、この際、この参照指摘を無視する、というのはアリだろう。が、むしろ、殿は宮と逢う前の昔に帰りたい、というのが本心かも知れない、と思えば、意味深な言い回しをした、と読むのも一興だ。少なくとも、作者は読者がそう読むことを許容している、ような気はする。

と、うち嘆きたまひて(と殿は嘆きなさって)、

「*今はとて思し離れば(もうこれまでとお思いになって貴方が別居なさると)、まことに御心と厭ひ*捨てたまひけると(本心から私が厭になってお見捨てになったものと)、恥づかしう心憂くなむおぼゆべき(情けなく悲しい気持になります)。なほ、あはれと思せ(どうか私を憐れんで、お見捨てなさないで下さい)」 *「今はとて思し離れば」は、朱雀院が遺贈宮邸の修理に取り掛かり、宮が其処へ移るという話が事情背景にありそうな言い方、に聞こえる。 *「捨てたまひける」は仮定文中の事態設定を示す過去形だから、実際の事態は未来に起こることであって、宮が出家したという過去事実について、平癒祈願は名目で本心は殿を嫌気したからだ、という意味に取るのは正しくない、ように思う。が、その含みも味がある。

と聞こえたまへば(と申しなさると)、

「*かかるさまの人は(出家者は)、もののあはれも*知らぬものと聞きしを(情には関知しない生き方をするものと聞いていますが)、ましてもとより*知らぬことにて(まして私はもともとそういうことが良く分からないものですから)、いかがは聞こゆべからむ(如何お答え申して良いものやら)」 *「かかるさまの人は」は<この私のように出家した者は>という言い方だが、文意としては<出家者というものは>という一般論に聞こえるのが、この宮の発言全体の語感だ。 *「知らぬもの」は、一般論としての規範提示として「知らで行なうべきもの(関与せずに勤行すべきもの)」を意味する、かと思う。 *「知らぬこと」は自分の私的な事情として<分からないこと>という言い方。だが、それにしても思い切った、相当に突っぱねた言い方

だ。此処まで気丈に成れたから、体調も回復したのだろう。腹を括ってしまえば、あんなに恐ろしかった源氏殿も、ただのオジサンだ。結局、源氏殿は朱雀院に勝てない。朱雀院にしてみれば、自分は王であり、源氏殿は臣下だから、是はもう本当に初めから絶対負けない立場にいたのであり、競う相手ではない。ただ、兄として弟に親愛の情を持っていて、幾分かは手に負えないところもあるが、それも同族血筋の幅と見做せるので、源氏殿は可愛い身内の者であり続けた。つまり、実際の身分秩序を世間の客観評価そのままと置いておけば良い。だから、負けないし、同時に、勝ってもいない。次弟は周辺にいた主要な人物であるに過ぎない。が、源氏殿は兄帝に、その財労務負担する藤原氏体制に王家血筋が、勝てるかも知れないと思った分だけ、負けた。多分、そういうことなんだろう。

とのたまへば(と宮が仰るので)、

「かひなのことや(何と張り合いのない)。思し知る方もあらむものを(そうは言っても、現にこうして、お分かりの情もあるでしょうに)」

とばかりのたまひさして(とだけ言い差しなさって)、若君を見たとまつりたまふ(側で寝ている赤子を見入り申し上げなさいます)。

[第三段 源氏、老後の感懐]

御乳母たちは(若君の乳母たちは)、やむごとなく(高貴な家柄の)、めやすき限りあまたさぶらふ(見た目も良い者ばかりが多数仕えていました)。召し出でて(殿はその者たちを呼び揃えて)、仕うまつるべき心おきてなどのたまふ(仕事に就く際の心構えなどを注意なさいます)。

「*あはれ(ああ何とこの子は尊く愛しいことか)、残り少なき世に(残り少ない私の老後に)、生ひ出づべき人にこそ(大きく成って行くんだね)」 *「あはれ」は感動詞で<ああ我は、ああ何と>という言い方であり、直ちには現代語の「哀れ・憐れ」を意味しない。特に此処では「残り少なき世に」とあり、はっきり<この世に命ある者の存する尊さ>とその貴重性を示しているのだから、それを<かわいそうに>と言い換えるのは、一読者の深読みを他の読者に押し付けるようで、私は強く反感する。確かに源氏殿には、この若君は自分の血を引く者ではない、という思いはあるだろう。それで、赤子に対して冷ややかな態度を取る、ということは有り得るだろう。それを自ら見越して、自嘲気味に皮肉を込めた言い回しをする、ということも有り得るだろう。だから、内心文ならそういう文意も有り得るが、この場面でははっきりと「心おきてなどのたまふ」と実際の発言であることが示されている。「若君を大事に育てよ」は、言うまでも無いことだが、立場上からして殿は乳母女房たちに念の為にも、言わずには居られない注意事項だ。この「立場上」ということは、家の管理者たる大殿にとってとても重要な責務だ。それに源氏殿がどう思おうと、この若君は朱雀院の孫であり、源氏殿の姪が産んだ子であり、同族血筋であることは事実で、殿と宮との婚姻関係を左に置いて、決して疎かには出来ない貴人だ。その認識が無ければ、この身分秩序体制下で社会人として生きて行けないし、赤子に罪は無いという気持ちもあつただろう。だから、この「あはれ」は<ああ、この子は>だけで良さそうに思えるが、あえて<尊く愛しい>と明示補語する。

とて(と殿は言つて)、抱き取りたまへば(若君を抱き上げなさんと)、いと心やすくうち笑みて(赤子はとても穏やかに笑つて)、*つぶつぶと肥えて白ううつくし(ぷっくりと太つて色白で可愛らしい)。 *「つぶつぶ」は<ふくらと肥えたさま。丸くふくらんでいるさま。>と古語辞典にある。が、「つぶ」は<ちいさいもの>で、「つぶつぶ」はそれが<たくさんあるさま>という語感で、泡立つ沸騰感とか果実が育つ

膨張感などを考えてもくふっくら丸い>印象は「つぶつぶ」に結びつかない。で、勝手に「つぶつぶ」を瑞瑞しさのくプリプリ感、ぷっくり>と取ってみる。

大将などの*稚児生ひ(大将などの幼い時の様子を)、ほのかに思し出づるには似たまはず(少し思い出しなさったのには似ていらっしやらない)。 *「稚児生ひ(ちごおひ)」は<おさなだち。幼い時の様子。>と古語辞典にある。

女御の御宮たち(にょうごのおほむみやたち、桐壺女御腹の御子たちは)、はた(そちらの方はまた)、父帝の御方さまに(ちちみかどのおほむかたさまに、父親の今上帝の御血筋寄りに)、王気づきて(わうけづきて、王家らしく)気高うこそおはしませ(気品を持っていらっしやれど)、ことにすぐれてめでたうしもおはせず(特に秀でて魅力的ではいらっしやいません)。

この君(この若君は)、いとあてなるに添へて(とても品があるのに加えて)、愛敬づき(親しみのある表情が豊かで)、まみの*薫りて(目元に優美さが漂って)、*笑がちなるなどを(笑みがちなところなどを)、いとあはれと見たまふ(殿はとても印象深くお思いになります)。 *「薫る(かをる)」は<芳香が立ち昇る→潤いが漂う>だろうか。「まみの薫りて」は<目が潤んで→情を誘う趣があって>という語感だが、赤子に<情を誘う>は似合わないので<優美さが漂って>として置く。 *「笑がち」は「ゑがち」と読みがある。「ゑみがち」ならそのまま現代語だが、「笑がち」という漢字表示ならともかく、「ゑがち」という音は分かり難そうに思えて、この語りで意味が通じたのか疑問に成る程だ。

思ひなしにや(そう思っ見て見る所為か)、なほ(若君はやはり)、いとようおぼえたりかし(衛門督に良く似ているように思えたのです)。ただ今ながら(もう今から)、*眼居ののどかに恥づかしきさまも(目の表情が穏やかで見透かされそうな気がするのも)、やう離れて(普通とは違って)、薫りをかしき顔ざまなり(印象深い顔立ちです)。 *「眼居(まなこゑ)」は<めつき、まなざし>と古語辞典にある。

宮は*さしも思し分かず(宮は衛門督の具体的な印象が薄いので、其処まではお分かりになりませんでした)。 *「さしも」とは何事か、と思う。熱い肉棒を挿し込まれて、濃い思い切りを垂らし込まれて、孕んで、産み出した、というのに、その相手の印象が無いとは、つくづく女は信用出来ない、というのは私の実感ではない。が、強盗強姦でもあるまいし、子供の父親に当たる近臣の公卿を少しも知ろうとしないのは、もはや単に被害者では済まない自分の立場を顧みない世間知らずの怠慢姿勢だ。いや別に、誰に感情移入するでもないが。

人はた(女房たちはまた)、さらに知らぬことなれば(全く知らない事情なので)、ただ一所の御心の内にのみぞ(ただ殿お一人の御胸中に)、

「あはれ(ああ何と)、はかなかりける人の契りかな(あっけなかった衛門督の天運か)」

と見たまふに(とお思いになると)、大方の世の定めなさも思し続けられて(全体の世の無常も続けて思われなさって)、涙のほろほろとこぼれぬるを(涙がほろりとこぼれてしまうのを)、今日は言忌みすべき日をと(今日は祝日なので控えねばと)、おし拭ひ隠したまふ(押し拭ってお隠しなさいます)。

「*静かに思ひて嗟くに堪へたり(しみじみ感慨深い)」と(と殿は)、うち誦うじたまふ(白氏の漢詩を詠吟なさいます)。五十八を十取り捨てたる御齡なれど(五十八に十少ない御歳だが)、末になりたる心地したまひて(晩年になった気がなさって)、いとものあはれに思さる(とても感傷的におなりです。でも本心では、)。「*汝が爺に(おまえは実の父に似るなよ)」とも、諫めまほしう思しけむかし(とでも赤子に諭したくお思いだったのかもしれない)。*「しづかにおもひてなげくにたへたり」については白居易の漢詩からの引用らしく、それらしい注釈はあるのだが、その注釈が分かり難く、より簡潔な解説がないかと Web 検索したが、何故か、適当なものが見つからない。そこで、邪道かとは思うが、注釈を摘まみ食いして文意を探りたい。で、どうやら下敷きの漢詩は「白氏文集卷二十八」に収められた「自嘲」と題されたものらしい。で、詩文は「五十八翁方有後 静思堪喜亦堪嗟 持盃祝願無他語 慎勿頑愚似汝爺」らしい。で、歌の詞書か説明として「白楽天は子なくして老にのそむ人也 五十八にてはしめて男子むまれたり むまるゝ事をそきによりて生遅と名つく その子にむかひてつくりける詩也」と古注にあるらしい。で、歌の大意は<五十八歳で子を得た、しみじみ嬉しく感慨深い、祝杯の他に言葉も無いが、わが子よ、こんな頑愚な汝の親爺に似るなよ>だろうか。是で何とか文意を得た。*「汝が爺に」は「なんぢがちちに」と読みがある。同じ漢詩中の詩文からの引用だ。注には<明融臨模本、朱合点。『一葉抄』は「双紙詞也」と指摘。『集成』は「「汝が爺に」(そちの実の父、柏木の轍を踏むでないぞ)とでも、いましめたくお思いになったことであろうよ。前引の詩中の句による草子地。『完訳』は「実父柏木に似てはならぬと、源氏は思ったはず。前引の漢詩によって、語り手が推測」と注す。>とある。軽口調だが、文学少女が知識に酔うのを博学を気取ったお歴々が気が利いていると談笑するのがサロンの雰囲気なら、私には近付きたくもない遠い世界に思えるものの、案外こんなことが落語の下地になっているのかも、とも思えて、説教じみた話をつくづく眉唾物だと改めて思う。

[第四段 源氏、女三の宮に嫌味を言う]

「このことの心知れる人(この若君が不義の子だという事情を知る者が)、女房の中にもあらむかし(女房の中にもいることだろう)。知らぬこそ(誰だか分からないのが)、ねたけれ(癩に障る)。烏滸なりと見るらむ(私が若子を愛でるのを茶番とバカにしていることだろう)」と、安からず思せど(と殿は心穏やかならずお思いになるが)、

「*わが御咎あることはあへなむ(しかし事を荒立てて、この若君が傷付くことは控えよう)。*二つ言はむには(父親と手引き者を明かすように二つのことを迫るのは)、女の御ためこそ(宮の身には)、いとほしけれ(辛いことだろう)」など思して(などとお考えになって)、色にも出だしたまはず(不義の子と承知している素振りには微塵も示しなさいませぬ)。*「わが御咎」の「御」は、誰にまたは何に対する敬称か。対象は若君としか思えない。だから、この「わが」の「わ」は<吾、我>ではなく<和、若>なのだろう。*「ふたついはむ」は分からない。上文に「御咎」とあり、この文の話題が「女の御ため」とあるから、「言はむ」は殿が宮に<文句を言うこと>のようだ。で、その文句の「二つ」だが、今の状況と上の話とを考え合わせると、その一つは<宮が若君を不義の子だと明かさないうこと>で、もう一つが<宮がその不義の手引きをした者を明かさないうこと>あたりか。で、その二つの疑義を殿が宮に問い詰める、というのがこの「二つ言はむ」かとも思えるが、むしろ<不義の子の明示>は若君の立場に障ることで、宮の責任としては<若君の実の父親を明かすこと>なのかも知れない。しかし、それらは結局、その全てが<若君の不義の子たる事実の明示>を意味して、「女の御ため」どころか「わが御咎」となるのであり、延いては殿自身の恥でもあり、朱雀院や今上帝の名誉をも汚す一大政治不祥事とも成り予ねない、という実に大火種である。密通の露見後に直ちに殿が宮と衛門督を断罪すれば、それぞれの関係性は破局するにしても、それぞれの立場が公式に整え直れば、それぞれの社会的立場は保たれる可能性もあ

った。が、若君が六条院の子として生まれてしまった後で、まして衛門督が死に、宮が出家し、その子の実質的な庇護者が殿以外に居ない今となつては、事の露見は不祥事の汚点と若君の不遇を残すだけだ。他の誰のため、という以前に、殿自身の保身のためにも、今や事の秘匿は必須だ。だから、このような文意だとすると、「二つ」の中身も然り乍ら、「女の御ため」という話題自体が分かり難いので、全く別の文意かも知れない。また、この「をんな」は今でも<妻>を意味するのだろうか。今は<母>を意味するのだろうか。それすら分かり難い。

いと何心なう物語して笑ひたまへるまみ(とても無邪気に何かものをお笑いなさる目元に)、口つきのうつくしきも(口先の可愛らしきも)、「心知らざらむ人はいかがあらむ(事情を知らぬ人はどう思うだろう)。なほ(それにしても)、いとよく似通ひたりけり(本当に良く衛門督に似通っている)」と見たまふに(と殿は若君を御覧になって)、

「親たちの(藤原家のご両親が)、子だにあれかしと(せめて子供でも残してくれたらと)、泣いたまふらむにも(衛門督の死を悼んでいらっしゃるだろうに)、え見せず(この若君を、お見せ申すことも出来ず)、人知れずはかなき形見ばかりをとどめ置きて(人知れずこんな小さな子を形見に残して)、さばかり*思ひ上がり(あれほど誇り高く)、*およすけたりし身を(立派に出世した身を)、心もて失ひつるよ(自分で消してしまったのだ)」 *「思ひ上がる」は<誇り高い>。 *「およすく」は<成長する、成人になる>。藤原氏で<大きく育つ>というのは<立派に出世する>ことなのだろう。

と(とその父親である故衛門督が)、あはれに惜しければ(しみじみと惜しまれるので)、めざましと思ふ心もひき返し(けしからぬという気持も忘れて)、うち泣かれたまひぬ(心でお泣きになりました)。

人びとすべり隠れたるほどに(女房たちが早々に席を外すと)、宮の御もとに寄りたまひて(殿は宮のお側に寄りなさって)、

「この人をば、いかが見たまふや(この子を如何お思いか)。かかる人を捨てて(こんな可愛い子を捨てて)、背き果てたまひぬべき世にやありける(あなたは出家なさったわけだ)。あな、心憂(ああ情けない)」

と、おどろかしきこえたまへば(と不意に辛らつなことを申しなさると)、顔うち赤めておはす(宮は顔を紅潮させて強張りなさいます)。

「誰が世にか 種は蒔きしと 人間はば いかが岩根の 松は答へむ (和歌 36-04)

「誰の種かと人間はば 末子答えを先ず言わね (意識 36-04)

*「岩根の松」は、土に根を張るような大きな岩の僅かな土溜りから芽を出した松。意外な所に生えた、松一まつ一待つ一末、とは、如何にもこの物言わぬ宮の腹から生まれた若君に似たり。大喜利物が意外に良く出来たので披露した、みたいな遊び歌の趣き。勿論、傍目には「色にも出だしたまはず」なれど、且つは「このことの心知れる人、女房の中にもあらむかし。知らぬこそ、ねたけれ。烏滸なりと見るらむ」と思う殿なれば、せめて宮だけには自分が若君を不義の子と承知していることを明示して、その上で<茶番は承知の上で私は良い夫を演じてるのさ、お前が宮仕えを楽しむ以上に楽しみながらね>という牽制を、誰かは知らぬ手引きをした女房、とは侍従だが、に宮をして伝

えさせようと強がりというか照れ隠しをしている、という殿の目論見は絶対にある。いや、だからこそ、その余裕を示すためにも出来の良い大喜利物を用意する必要があったのかも知れない。注には<源氏の贈歌。「岩根」に「言はね」を響かす。「松」は若君（薫）を喩える。明融臨模本、付箋「あつき弓いそへの小松たか世にか万代かけて種をまきけむ」（古今集雑上、九〇七、読人しらず）。『異本紫明抄』が指摘する。>とある。早速に「古今和歌集の部屋」サイトを頼ると、この引歌は「梓弓」は「磯辺」の「い」を「射」の意で呼び出す枕詞とのことで、歌筋は<この松は誰が昔に種を蒔いたのか>であり、詠み方として「梓巫女」と「小松引き」の占いごとが「よろづ世予ねて」に掛かっているのが味わいであるかのような説明で、つまりは大喜利物の面白さであるらしい。さらに言えば私には、「いそへのこまつ」は<射る其の野辺の小松を添えて>、「たがよにか」に<弓を手繰る>、「よろづよかけて」は<いろいろ願掛け呪文をして>、「たねをまきけむ」が<託宣を言い放つ>、みたいに関じられて、「梓弓」の呪術の言霊に丸々取り込まれた歌のようにも思える。枕詞を何かを言い出す語呂合わせとして、意味を取らない、意味を飛ばす、という語用も遊び心があって、特にその場の即興性としては洒落ている気がするが、この歌はあえて枕詞の意味を引く詠み方の面白さを示す歌なのかもしれない、と試してみたりした。が、フと思っただけのことを文字にしてみると、ずいぶん根拠の無い思い付きだと思ひ知る。が、それでも面白がって書いて置く。

*あはれなり(困るよね、なんてね) *「あはれなり」は洒落言葉としての語用だから、是を<不憫だね、かわいそうに、哀れだな>と聞いても、それが冗談だという前提で言い換える分にはどれも楽しい。しかし、万が一にも、是を冗談と思わずに真に受ける人がいるのを恐れて、と言っても私がそれを心配する立場でもなければ義理も無いが、念の為に<なんてね>を補語する。

など、忍びて聞こえたまふに(などとそっと申しなさると)、御いらへもなうて(宮は御応えも無く)、ひれふしたまへり(恥じ入って顔を覆って伏しなさいました)。ことわりと思せば(冗談に応じる余裕が無いのは無理もないと殿はお思いになって)、しひても聞こえたまはず(無理に返歌も求めなさいません)。

「*いかに思すらむ(宮は衛門督の死を如何思っているのだろうか)。もの深うなどはおはせねど(深く思い詰めてはいらっしゃらないが)、いかでかはただには(いくら何でも何とも思わないではいられないまい)」 *「いかに思すらむ」は、衛門督の死を宮は如何思っているのだろうか、ということらしい。若君のことについてなら、「いかに思し奉らむ」だろうか。注には<以下「いかでかはただには」まで、源氏の心中。女三の宮の心中を推測。『集成』は「どうして平気でおいでになれよう。柏木の死に悲しい思いでいられるだろう、というほどの意」。『完訳』は「宮が柏木の死を平静に受けとめているはずがない、の意」と注す。>とある。

と、推し量りきこえたまふも(とご推察申し上げなさるのも)、いと心苦しうなむ(とても気詰まりです)。

[第五段 夕霧、事の真相に関心]

大将の君は(近衛左大将の源君は)、かの心に余りて(あの衛門督が思い余って)、ほのめかし出でたりしを(今はの際にほのめかして口にしたことを)、

「いかなることにかありけむ(彼が思い悩んでいたことは、どんなことだったのだろう)。すこしものおぼえたるさまならましかば(もう少し意識がはっきりしている時だったなら)、さばかりうち出でそめたりしに(あのよう打ち明け始めたのだから)、いとようけしきは見てましを(良く事情が分かっただろうに)。いふかひなきとぢめて(もう手の施しようもない末期の)、折悪しういぶせて(それも急変した時で)、あはれにもありしかな(苦しそうだった)」

と、面影忘れがたうて(とその時の藤君の面影が忘れられずに)、兄弟の君たちよりも(はらからのきみたちよりも、実の兄弟たちよりも)、しひて悲しとおぼえたまひけり(強く悲しく思っいらっしやったのです)。

「*女宮のかく世を背きたまへるありさま(父殿の妻である女三の宮がこのように出家なさった成り行きは)、おどろおどろしき御悩みにもあらで(そんなにひどいご病気でもないのに)、*すがやかに思し立ちけるほどよ(ずいぶんあっさりのご決心なさったものだ)。また、さりとも(またそれにしても)、許しきこえたまふべきことかは(殿もそれをすんなりとお許し申しなさって良いものだろうか)。*「をんなみや」は<女三の宮>のことらしい。が、これは源君の内心文だ。源君から見て、女三の宮は父源氏殿の妻であり、義理の母に当たる。年齢は源君 27 歳、女三の宮 22 歳、源氏殿 48 歳、紫の上 38 歳、ということだが、また、女三の宮も紫の上も出家しているが、生活上の関係性は二人ともに先ずは源氏殿の妻だ。ただ、義理の母という関係性は全く机上のもので、源君が母代わりとして会えるのは花散里だけで、その他の御方々には源君は生活上での接点を持ってない。何かの所で面会することがあったとしても、母としてではなく各個別に各身分に応じた接し方をするようだ。家庭というより超高級なイベント企画運営会社の役員室専属秘書みたいな印象。ともあれ、源君が内心文ながら女三の宮を「女宮」と呼称しているワケだが、これが現代社会の現代語として、どういう呼び方になっているのかと考えても、現代社会の体系には当てはまる設定は無く、当時としても普通じゃない気もするが、この物語の設定のまま<殿の妻>とする他は無く、少しだけ家族関係を加味して<父殿の妻>というのが精一杯だ。*「すがやか」は<物事が滞りなく進むさま。>または<未練がなく思い切りのよいさま。>と大辞泉にある。

*二条の上の(二条の上が)、さばかり限りにて(あのような危篤状態で)、泣く泣く申したまふと聞きしをば(泣く泣く出家願いを申しなさったと聞いたのでさえ)、いみじきことに思して(殿はあるまじき事とお思いになって)、つひにかく*かけとどめたてまつりたまへるものを(遂に在家信者に引き留め申しなさったというものを) *「二条の上」は<紫の上>らしい。が、紫の上は既に六条院に戻っているはずだ。若菜下巻十一章五段に「十二月になりけり。十余日と定めて、舞ども習らし、殿のうちゆすりてののしる。二条の院の上は、まだ渡りたまはざりけるを、この試楽によりてぞ、えしづめ果てで渡りたまへる」とあった。ただ、上が出家したのは蘇生後の昨年四月末くらいで、当時は二条院で療養していた、という事情から、上を「二条の上」と呼ぶのにはある程度客観性がある。*「かけとどむ(掛け留む)」は<引き留める>。殿は上の出家を許さず在家での仏門帰依をさせて、俗世に<引き留めた>ということらしい。しかし、在家でも食事は精進料理で禁欲生活を守り一定時間毎の読経勤行を努める、ということらしく、逆に出家信者も俗世を絶つとはいながら世俗の布施で食い繋ぐことを思えば、出家は修行しやすい生活形態に過ぎず、在家でも信仰心次第で世俗を絶った意識で生活出来るとしたら、殿が上を俗世に<引き留めた>とは言えない気もする。さっぱり分からないし、それ以上の興味も無い。

など(などと源君は)、取り集めて思ひくづくに(考え合わせて整理すると)、

「なほ(やはり)、昔より絶えず見ゆる心ばへ(昔から絶えず見えていた衛門督の宮に寄せる恋心は)、え忍ばぬ折々ありきかし(抑え切れなくなった時が何度かあったに違いない)。

いとようもて静めたるうはべは(とても良く落ち着いたうわべの見掛けは)、人よりけに用意あり(誰より特に気配りがあって)、のどかに(穏やかで)、何ごとをこの人の心のうちに思ふらむと(何をこの人は心中で考えているのだろうと)、見る人も苦しきまでありしかど(会う人も気詰まりで困ることさえあったが)、すこし弱きところつきて(少し気弱な所があって)、*なよび過ぎたりしけぞかし(女のことで失敗しがちだったのだろう)。 *「なよぶ」は<なよなよする>と古語辞典にある。「なよび過ぐ」は<なよなよし過ぎている>だろうが、「なよなよ」は<女様女様>を思わせる形容句なので<物腰が柔らかい>のか<涙もろい>のか<未練がましい>のか内容は様々だ。此处では上文の「え忍ばぬ折々ありきかし」の「かし」の不確かさを再考しているのだから、「なよなよ」は<突っ張らない→風になびく→その場の動きに同調する→自制が効かない→律を忘れて情に流される>ような藤君の性格を言っていて、それが「過ぐ」というのは<恋愛関係で失敗しがち>だと源君は結論付けた、ということを示して「けぞかし」と内心で原因理由を納得した言い方になっている、と見るのが分かり易い。

いみじうとも(どんなに思い詰めても)、さるまじきことに心を乱りて(あるまじき不義密通に及ぶという乱心をして)、かくしも身に代ふべきことにやはありける(こんなふうには命と引き換えにするようなことだろうか)。人のためにもいとほしう(相手の立場を損なって)、わが身はいたづらにやなすべき(自分が死ぬことになっても、それでも良いと言うのか)。さるべき昔の契りといひながら(そうなる運命とは言いながら)、いと軽々しう(余りに軽率で)、あぢきなきことなりかし(不幸なことではないか)」

など、心一つに思へど(などと一人で考えるが)、女君にだに聞こえ出でたまはず(妻にさえ相談を持ち掛けなさいません)。さるべきついでなくて(適当な時機を得ず)、院にもまだえ申したまはざりけり(源氏殿にもまだ申し上げる事が出来ませんでした)。さるは(しかし是非)、かかることをなむかすめし(こういうことを衛門督がほのめかしまして)、と申し出でて(と申し出て)、御けしきも見まほしかりけり(殿の反応を見てみたかったです)。

父大臣、母北の方は(衛門督の御両親は)、涙のいとまなく思し沈みて(涙が乾くこと無く落胆なさって)、はかなく過ぐる日数をも知りたまはず(空しく過ぎる日数もお分かりありません)、御わざの法服(御法要の僧衣や)、御装束(親族の御喪服類)、何くれのいそぎをも(その他諸々の準備は)、君たち(弟君たちや)、御方々(その御夫人方が)、とりどりになむ(手分けして)、せさせたまひける(手配なさいました)。経仏のおきてなども(祭壇に置く経典や仏画仏像などの位置も)、右大弁の君せさせたまふ(弟君の右大弁が指示なさいます)。

*七日七日の御誦経などを(七日ごと四十九日までの追善供養などを)、人の聞こえおどろかすにも(従者がご臨席を促し申し上げても)、 *「なぬかなぬか」は<初七日から四十九日まで、7日目ごとに営む死者の追善供養。>と大辞泉にある。

「我にな聞かせそ(念仏は聞きたくない)。かくいみじと思ひ惑ふに(こうして私が誰よりも静かに大納言の死を悼んでいるのに)、なかなか*道妨げにもこそ(うるさい読経は却って、彼の成

仏の妨げにも思える)」 *「道妨げ」は注に<大島本、朱合点、行間書入「拾 おもふ事ありてこそ行け春かすみみちさまたけに立ちなかくしそ」（拾遺集雑春、一〇一七、紀貫之）を指摘。>とある。バージニア大学の拾遺集 Web 公開文によると、この引歌は「延喜十五年齋院の屏風に霞をわけて山寺にいる人あり」と詞書があるようで、歌筋は<決心して出家したのだから春霞は世俗の雅な風情で私の行く道を隠したりして邪魔などをしないでくれ>みたいなことになりそうだ。ということは、此処の「道妨げ」も<仏道に障る>ということらしいが、逢引を誘う春霞が世俗への未練を掻き立てるのは違って、御誦経が仏道を妨げる、というのは理が立たない。だから是はもう、理を忘れた情に任せた妄言として読んで置く。

とて(とって父大臣は)、亡きやうに思し惚れたり(何も手につかずに、死んだようにただ茫然と為さっていました)。